タタラ場があった更なる痕跡Ⅱ

戸谷克己 著

飯能の原市場という場所に転居して来て、一番驚いたことには、小字(こあざ)名の付いた地域の各所に、必ずと言っていい位、祠や神社が点在し、野辺には石仏点々と佇んでいるということであった。それは、言うまでもなく、この地において、最近に至るまで、神や仏の信仰が確かなものとして存在していたということを物語っている。地域や家族や個人の平穏や繁栄をいうことを願って神や仏への信仰を大切に守り続けてきたのであろう。

だが、明治維新(一八六八年)直後、そのような日本の信仰に、大きな改革を迫る事態が発生した。それまで、一般的な民衆にとって、神も仏も同格なものとして、何等区別もせずに、その力にすがって生活を営んで来たのであるが、王政復古という形で、日本の国家統治の形を天皇制に求めたことによって、天皇制に繋がる神を仏よりも優位なものとする政策を断行したのであった。それが、国民の内心を天皇制というものによって統御することを目指す「神仏分離令」であり、そのことによって日本の各地は、廃仏毀釈運動の渦に巻き込まれていくことになった。そして、更に、その支配の形を徹底化していくために強行されたのが、一九〇六年の「神社合祀令」であった。合祀という言葉から分かるように、それは小字のような小さな集落にあった神社や祠をもっと大きな範囲で一箇所に集めて祀るというものであった。そのことは、取りも直さず、各地域の各共同体の神々を、そこから分離させることによって、そこで生活している人達の意識や精神に、生活に直接結び付いた産土(うぶすな)の神々に代わって、中央集権的な現人神としての当時の現天皇とその祖先神としての万世一系(?)の皇祖皇宗の存在＝国家神道を強く植え付けることを目的にしていたのである。

飯能の原市場の各地に、現在も尚、小さな神社や祠が昔のまま残存しているということは、そのような「神社合祀令」の強制が、この地の辺りまでは及んで来なかったということを物語っている事実であろう。でも、そのような余波が必ずしも、この地まで及んでいなかった訳ではない。原市場の房ケ谷戸にある「五社神社」は、そのような余波がこの地にまで確かに届いていたということを物語る例の一つである。だが、皮肉にも、五つの神社が統合されて一つの「五社神社」になることによって、逆に、この地がかつてどのような場所であったのかということを強く物語る事象にもなっているのだ。各地にあった神社を一つの場所にまとめたということは、ただ徒らに意味もなく適当に集めたのではなく、ある意図の元に集められたはずだと、私は思うのである。この五社神社には、その名の通り、秋葉、愛宕、稲荷、日吉、三島といった五つの神社が集められているのだが、それぞれの神社に祀られている祭神が、どのような神であったのかということを明らかにしていけば、私はこの「五社神社」に統合しようとした時の意図と、この地がどのような場所であったのかということが明らかになっていくと思うのである。

秋葉神社も、愛宕神社も、火防(ひふ)せの神として有名である。秋葉神社の祭神は火之迦具土神(ほのかぐつちのかみ)であり、愛宕神社の祭神の一つが火之迦具土命(みこと)で、同じ神である。『古事記』『日本書紀』によると、火之迦具土は伊弊再尊(いざなみのみこと)が神生みの最後に産んだ火の神の名前であり、伊弊再尊はその火によって陰部を焼かれて死んでしまうのであるが、その時苦しんで吐いた吐瀉物から生まれた神が、金属に関する技工を守護する金山彦と金山姫という神であった。つまり、秋葉神社も愛宕神社も、元々は金属の精錬や鍛造の神を祀った神社なのである。また、稲荷神社は、一般的には五穀を司る農業神としての稲荷大明神を祀る神社であるが、稲荷神の神使である狐が口にくわえたり尾に巻いたりしている宝珠は火炎の王であり、稲荷神社の鳥居が赤いのも火炎の色を表したものであることから、中世以降、農業の神としてだけではなく工業の殖産の神として崇められるようになっていったのであり、やはり秋葉神社や愛宕神社同様金属の精錬や鍛造の神を祀った神社であったのである。

それに対して、日吉(ひえ)神社の祭神は、「偉大な山の境界の棒」という意味の神名の大山咋大神(おおやまくいおおかみ)である。また、三島神社の本源は愛媛県大三島町の大山祇(おおやまづみ)神社であり、その祭神は「偉大な山の神霊」という意味の大山祇＝大山津見神である。(彼は、火の神・迦具上の体の各所から生まれた八神の山の精霊である山津見神(やまつみのかみ)を総支配する神でもある。)つまり、日吉神社も三島神社も、山に関する神であり、私は金属の精錬や鍛造に不可欠な炭を必要とした職人にとって、日吉神社も三島神社も自分達の職業に欠くことの出来ない大切な炭を供給してくれる神として崇め奉って来た神であったと思うのである。

五社神社のある房ケ谷戸の名栗(入間)川の対岸に金属の精錬と鍛造を意味する「赤工(あかだくみ)という地名と房ケ谷戸の隣りに「金山」という地名が残っているように、五社神社に統合された秋葉、愛宕、稲荷、日吉、三島の各神社は、金属の精錬や鍛造と重要な関連を持つ火と山(炭)の神を祀った神社であり、これらの神社はかつて、そのような職業に従事した人達にとって大切な重要な神々を祀る神社であったのである。そのことから、この地の周辺には、確実に「タタラ場」があったということが類推出来るのである。

それに、この五社神社には、秋葉神社の火伏せの神である「三尺坊大権現」を表した狐の背に立っている烏天狗と、愛宕神社の火伏せの神である「愛宕権現(勝軍地蔵)を表した馬の背に乗っている武装した姿の地蔵の二体の石像が祀られている。これらの石像は同じ手法で造られていることから、秋葉と愛宕の両神社がここに合祀された同時期に造られたものだと思われるが、芸術的に優れた彫りであり、このような像はあまり例がなく、ここに確かな火の信仰が脈々と継続されていたことを雄弁に物語っているのである。

(戸谷)